

成長と発達の捉え方についての一考察 —新聞記事と辞典類の「成長」と「発達」から—

手塚 知子*・広瀬 信雄**

I. はじめに

私たちは日常のなかで「成長」や「発達」という言葉を耳にする。それはニュースの中であったり、天気予報であったり、また教育の現場であったりと様々な場面で使われている。そして「成長」や「発達」する対象も、人であったり植物であったりと様々に異なる。このように頻繁に使われる「成長」や「発達」は、日々子どもと接する教師にとって重要なものといえる。それは教師が子どもの成長や発達に応じて、授業の方法を工夫したり内容を検討する必要があるからである。また子どもの成長や発達についての理解は、学習のみならず、日常生活での子どもへの支援や指導とも関わっている。そして、教育に携わる教師や大人達自身も、日々の実践のなかで子どもの成長や発達を願いつつ、また信じながら子どもと関わっている。

このような「成長」や「発達」の理解は、教育への前提となり、そして、その結果をどのように判断するかという評価、つぎにつながる教育活動とも密接な関わりをもっていると考えられる。

本稿では、そうした子どもの「成長」や「発達」をとらえるにあたり、まず身の回りで使われるそれらの一般的な言葉の用法やニュアンスについて探り、次に専門的な言葉の意味として、普及している国語辞典などを用いて、その特徴を把握することを目的としている。

教育の現場で子どもの成長や発達を目の当たりにしたとき、教師達はそれを「伸び」だとか「大人になった」という言葉で表現をする。こうした言葉の用いられ方は、身のまわりで一般的に用いられる「成長」や「発達」が含む意味であると考えられる。こうした言葉の整理から、子どもの「成長」や「発達」の新たな側面が見出されることを期待する。

II. 「成長」と「発達」の一般的な用いられ方に対する検討

「成長」と「発達」について、一般的な用いられ方を調べるため、朝日新聞の記事にお

* 山梨大学大学院研究生

** 山梨大学障害児教育講座

ける「成長」と「発達」の記載のされ方と、その意味について検討を行った。対象としたのは、朝日新聞の朝刊本紙2009年4月1日～5月1日までの「成長」と「発達」それぞれの用語である。用語の検索は、聞蔵Ⅱにより行った。その結果、「成長」は205件であり（図1）、「発達」は26件（図2）の通りであった。

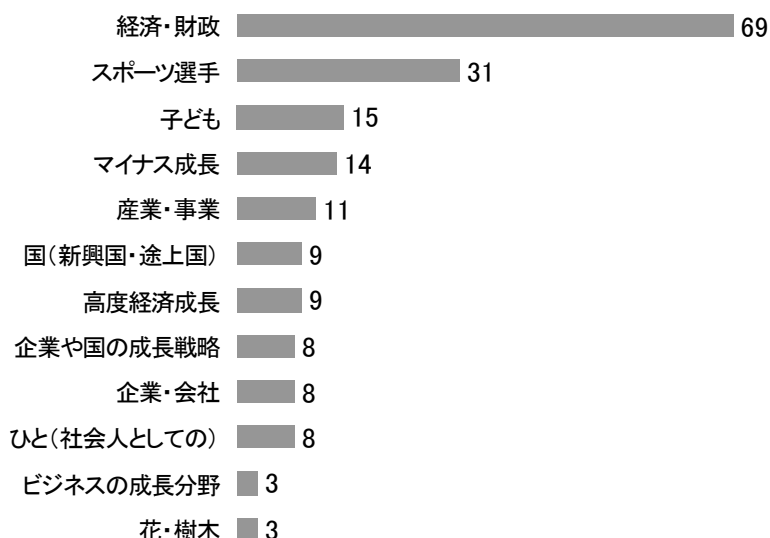


図1 「成長」が使われている記事の数

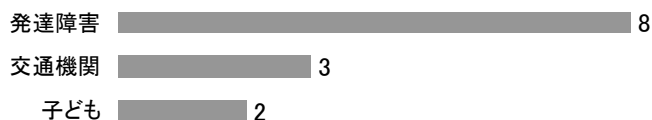


図2 「発達」が使われている記事の数

1. 新聞記事における「成長」

まず「成長」については、経済成長率や財政の成長という使われ方が多かった。新聞ではほぼ毎日、この成長という記載がされており、私たちも普段多く耳にする使われ方といえる。次に多かったのは、スポーツ選手の成長である。監督が選手の伸びや技術の獲得を意味する場合に使われる。また選手自身が苦難を乗り越えた自分を、成長したと表現するものも多い。このことから、スポーツにおける成長は、技術の獲得や期待される能力の伸び、そして精神面でのたくましさを意味しているものといえる。

子どもに対する成長という語の用いられ方は、新聞の教育面や生活面の中での記載が多く、子どもの成長を見守る、また読み書きができるようになり成長した、という使われ方である。つまり子どもの成長という場合には、体の成長や学習の習得、そして学習への意

欲を持つこと、と考えられる。またそれは望ましい変化をさし、成長ということも伺える。この他にも各1件ずつではあるが、脳の成長・ips 細胞の成長・鳥や貝の成長・空洞の成長という用いられ方がみられた。

以上より、「成長」は望ましい姿や状況へ近づくこと、またその獲得といえる。そして、成長するのは、人の身体や意欲といった精神であり、また社会の経済や財政である。さらに自然界の動植物についても、その伸びを表現して成長が使われていることがわかる。

2. 新聞記事における「発達」

「発達」に関する新聞記事は、「成長」に比べると少ない。すなわち、一般的には成長という言葉の方が私たちに身近であることが伺われる。そのため、「発達」について、朝日新聞の朝刊本紙2009年4月1日～7月1日までの記事、60件について検討を行うこととした（図3）。

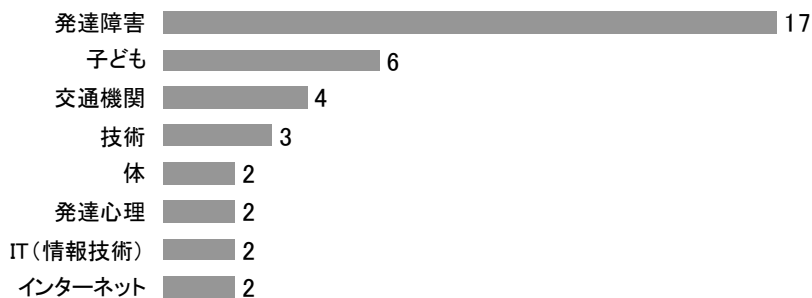


図3 「発達」の3ヶ月間の記事数

「発達」の使われ方で多いのは広汎性発達障害や、発達障害の子どもという表記である。発達障害という言葉や概念に対する社会の関心の高さが示されているといえる。

また子どもの発達という場合には、子どもの発達相談や子どもの発達を知りたいという使われ方であり、心身の両方を合わせた成長の意味として使われている。

発達は、交通機関にも使われる。交通網の発達や公共交通機関の発達という表記である。この発達という場合、成長に置き換えて意味を汲むことはできない。すなわち、発達に含まれる独自の意味や観点からの、使われ方と推測される。成長を伸びと捉えるのであれば、この場合の発達とは伸びと広がりという縦と横の広がりを内包するものと考えられる。また、発展という言葉に置き換えられる意味を持つものと思われる。

その他に、発達とともに用いられる言葉として、各1件ずつであるがマスメディア・携帯電話・望遠鏡・機械・自動車産業・クラブチーム・制度・経済・能力・知的・パーソナリティ・情緒・生殖器官・視力・発達特性・発達段階・コミュニケーション能力・脳・歯・低気圧があった。

以上から「発達」とは、成長と重なる部分が多く、心身の成長または発展という意味を

含むものと考えられる。そして近年になり聞かれるようになった、「発達障害」という名称が、一般社会では多く使われ、耳にする機会が多いといえる。

一般的な用いられ方としての「成長」と「発達」のまとめとして、「成長」とは心身の伸び、また望ましさへの伸びとして捉えられる。また「成長」は、「発達」よりも私たちの身近に使われている言葉である。一方「発達」とは、「成長」と同義につかわれる場合が多いが、成長のような縦の伸びに加え、広がりといった展開をも意味するものと考えられる。

Ⅲ. 辞典類における「成長」と「発達」の検討

辞典類の意味から、「成長」と「発達」の特徴をそれぞれ捉える（成長の意味；表1，発達の意味；表2）。辞典として、日常に馴染み深いと思われる国語辞典3冊（広辞苑，大辞泉，日本国語大事典），そして言葉の意味に加え解説のある百科辞典2冊（日本大百科全書，ブリタニカ国際大事典）を使用する。また，より専門性の高いと考えられる辞典から，教育に関わるとと思われる4冊（新版学校教育辞典，新教育社会学辞典，障害児教育大事典，新版心理学辞典）を選び，合計9冊により「成長」と「発達」の意味や内容を検討することとした。以下の表では，国語辞典は記載そのままを引用し百科辞典および，より専門性の高いと考えられる4冊の辞典については，記載内容から言葉の意味をより表していると思われる部分を抜粋し引用することとした。

1. 辞典類における「成長」

まず国語辞典における「成長」は，主に人や動植物が「育つ」ということが共通しているといえる。広辞苑や大辞泉には「育って大きくなること」，日本国語大事典では「育って成熟すること。育って大きくなること」とある。また育つという意味と同時に，規模の拡大も国語辞典に共通している。すなわち，育つこと，またその結果として規模が大きくなることを「成長」と捉えることができる。

次に百科辞典による「成長」は，大きさや長さ，重さを増していくものを成長と捉えている。これは日本大百科全書とブリタニカ国際大事典に共通するものである。すなわち「成長」にとって「増加」が重要なポイントになっていることが伺える。

より専門性の高いと思われる辞典において「成長」とは，教育学と心理学の辞典では「発達」もしくは「成熟」という言葉で子どもの伸びを表現し，「成長」という言葉を扱うものは少ない（例えば教育用語辞典，現代教育辞典，児童心理学辞典，新教育心理学辞典）。そのなかでも，新教育社会学辞典から広義には発達と同義であるが，狭義には個体の発育に伴う変容を量的な増大，増加としてみるとき成長ということが伺える。また「成熟が究極的な段階に達した状態を指し，成長はその状態に至るまでの前進的なプロセスをいうこともある」との記述がある。障害児教育大事典では，「成長」とは医学や小児科学といっ

た各分野によって捉え方は異なるが、機能の向上や量的な増大、形態的な表現として理解される。また系列的な変化のことを「成長」と示す。すなわち、量的な増大や増加が「成長」を捉える重要な点であり、また「成長」は結果というよりも、変化するプロセスに重点がある言葉とここでは推測される。

以上から、全体を通して共通しているのは、成長が量的な増大や増加を示すということである。また、変化した結果よりも変わりつつある過程を成長と捉えることができる。

表1 辞典類における「成長」の意味

辞典名	成長の意味
広辞苑	・ 育って大きくなること。育って成熟すること（生長：俗には発育と同じ意味で用い、生物学では生体の量の増加を指し、形態形成あるいは形態変化に対していう）。
大辞泉	・ 人や動植物が育って大きくなること。大人になること。 ・ 物事の規模が大きくなること。拡大。
日本国語大辞典	・ 人・動植物などが育って成熟すること。育って大きくなること。心身ともにおとなになること。 ・ 規模が大きくなること。また、内容が成熟すること。
日本大百科全書	・ 生物学用語で、個体発生中の生物個体において、個体全体の緒元（長さ、幅、重量など）、個体の各部分、あるいは個々の器官などの諸元が不可逆的に増加することをいう。 ・ 正常な成長には、生殖器官の成熟が伴い、こうして個体は独立した栄養生活を営む成体となる。身体各部、諸器官などの成長は、その部分における細胞数の増加、細胞実質の増加および細胞間物質の増加などに依存する。 ・ 動物個体の成長は、各部分の成長の総和として現れるので、そのようすは各部分の成長のようすと異なっている。 ・ 個体全体の成長の限界は、直接にはホルモンなどに支配される各部分の成長の限界により決められる。しかし、間接的には遺伝的要因、摂取する栄養の量と質、生理的諸機能、生態学的な環境条件などさまざまな要因が複合して働くことにより決められると考えられている。
ブリタニカ国際大百科事典	・ 生物が卵から成体へと刻々と変化している間に、大きさ、重量を増していく現象。もちろん一時的な水分の添加などによる変化は意味しない。この間、細胞の増殖を伴う。この現象において形態の変化を伴うが、その点を主眼点としてみる場合は発生という。
新版学校教育辞典	辞典に記載なし
新教育社会学辞典	・ 発達心理学では、成長または発育という概念は二様に使われる。広義には、発達と同義で、個体または個人の身体または身体の部分あるいはその器官が時系列的に大きくなり、長くなり、かつその機能がよりよく変化すること。身長や体重の増加、視聴力の増大、座る、立つ、歩くなどの一連の神経系の発育、性生殖の発育などがこれにあたる。 ・ 狭義には、個体の発育に伴う変容を量的な増大、増加としてみるときを成長といい、それに伴う機能や構造の分化や統合など質的な変化を発達とよび、前者を身体的成長、後者を精神的発達として区別する。この場合、成長は経験や訓練とは比較的關係が薄く、発達は成長の上に学習が加わったときに生じる変容とみなす。 ・ なお成長を成熟と区別し、成熟は発達が究極的な段階に達した状態を指し、成長はその状態に至るまでの前進的なプロセスをいうこともある。
障害児教育大事典	・ 医学—生理学的視点からすれば、成長とは、姿勢—運動系の機能の向上であったり、またその基礎をなす神経系の成熟を指す。 ・ 小児科学では、成長を個体発生の過程において生じる変化についての形態的表現として、発達をその機能的表現と理解する。 ・ 心理学の分野でも、同義的に用いる場合が少なくないが、成長という用語は個体の発育にともなう量的な増大、系列的な変化を記述するために用いられることが多い。この成長過程にともなう系列的な諸変化を構造的・機能的な面で個体が完態に向かう過程での変化としてとらえて意味づけていく場合に発達という概念が用いられやすい。そこには完態という語が方向づける一定の価値基準がおのずと内包されることになる。
新版心理学辞典	辞典に記載なし

2. 辞典類における「発達」

次に、辞典類で「発達」の意味を調べると、まず国語辞典では生体を対象にした場合、発達はより完全な（形態や機能をもつ）状態になることが共通している。また、規模の拡大も国語辞典間で共通する。そして発達する対象は、身体と精神の両方が含まれる。すなわち、「発達」には完全な状態という目標がはじめに想定され、発達するとはその目標へ向かって、身体と精神が展開されて進むという意味があるといえる。

百科辞典における「発達」とは、心身の機能や形態、そして才能といった質的部分の「上昇過程」を発達という。しかし一方で、日本大百科全書には「普通は発達とよばないような縮減や退行などの下降的变化も含む」ともあり、発達の捉え方の違いが辞典間においてみられた。すなわち、「発達」は主により良くなるという上昇過程を意味するが、それに縮減や衰退をも含める考え方と、また上昇過程のみを「発達」とする二つの考え方がある。

専門性の高いと思われる4冊の辞典における「発達」は、新教育社会学辞典、障害児教育大事典、新版心理学事典より、「発達」とはまず、本来的に変化をする「過程」と変化した「結果」という両方の意味が含まれているといえる。そして「発達」には、個人としての発達と、社会の一員として適応（適合）するための社会化の二つに分類されることが分かる。すなわち、個人としての発達は、生物有機体としての発達である。それは、心身の形態、構造、機能のより高次への変化といえる。また、そうした個人の発達する側面は、身体、認知、知能、感情（情緒、情動）、人格、社会性、言語、運動能力などである。一方、社会化としての発達は、社会の一員となるための発達といえる。それはまた、現代という文化に適応（適合）するために身につけていく人格や社会性、そしてスキルであったりと学習と不可分に結びついた発達といえる。

表2 辞典類における「発達」の意味

辞典名	発達の意味
広辞苑	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生体が発育して完全な形態に近づくこと。 ・ 進歩してよりすぐれた段階に向かうこと。規模が大きくなること。 ・ (心) 個体が時間経過に伴ってその身体的、精神的機能を変えてゆく過程。成長と学習を要因として展開する。
大辞泉	<ul style="list-style-type: none"> ・ からだ・精神などが成長して、より完全な形態や機能を持つようになること。 ・ そのものの機能がより高度に発揮されるようになること。 ・ そのものの規模がしだいに大きくなること。
日本国語大辞典	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発育して完全な形態に達すること。また、それに近づくこと。身体や精神などが成長すること。 ・ 進歩して完全な段階に達すること。また、その段階に近づくこと。進歩発展すること。 ・ 低気圧や台風などの規模が次第に大きくなること。
日本大百科全書	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生体が受胎してから死に至るまでの間における心身の機能や形態の変化のうち、一時的、偶発的なものを除き、長期にわたる系統的、持続的、定方向的な変化を発達という。このように定義された発達は、増大や進歩などの上昇的過程だけではなく、普通は発達とよばないような縮減や退行などの下降的变化を含むことに注意する。 ・ 術語としての発達は、主として個体の生涯にわたる変化に対して用いられ、また一般用法と異なり、完成・改善・能力向上などのプラスの価値づけはかならずしも含まない。さらにこれを拡張して、個々の集団や組織、あるいは一つの文明の成長の過程などに対しても適用することがある。 ・ 学術用語としての発達は、development (英語)やEntwicklung (ドイツ語)を原義としている。日本語の発達には、あるところから発してある目標に達するという即事的意味が強い。のに対して、英語、ドイツ語の原語はいずれも巻物を開いて中身を読む、もつれをほどくといった原義から出て、潜在していた本質が徐々にその姿を現す過程という意

	味に用いられるに至った。
ブリタニカ 国際大百科 事典	<ul style="list-style-type: none"> ・ 心身の形態や才能の上昇的変化の過程をさす。したがって、成長ときわめて類似した概念で、ときには同義的に用いられることもある。しかし、成長は個体の発育に伴う変化を、系列的に量的な増大として記述する場合に多く用いられ、発達はこのような変化を、量的な面だけでなく、構造や才能が分化、複雑化、精密化、有能化、結合化していくものとして記述する場合により多く用いられている傾向にある。また、発達という概念は、有機体の発育についてだけ用いられるわけではなく、無生物や、物理的・化学的現象についても、時間的変化発展を伴う場合には適用される概念である。
新版 学校教育辞典	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発達という概念は、胎児の中にある潜在的な可能性（遺伝形質や素質）が時とともに姿を顕在化するという意味で用いられてきた。これは現像（development）、すなわち内部に潜んでいたものが次第に表面に現れ、展開する（gradual unfolding）という原義に基づく概念規定である。 ・ 発達という用語には変化の「過程」という意味が含まれるが、従来は変化の「所産」や「結果」に注目していたため、時間の経過に対応させた変化の現象記述にとどまっていた。 ・ そこで人間の発達を言語、認知、情動、社会性、人格、運動などの機能別に分け、その範囲内での変化を記述することに目標がおかれ領域別に知見が蓄積された。
新教育社会学 辞典	<ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれの環境の中に生まれてきた個人が、そこでの生活を通して、心身の形態、構造、機能などを一定の方向に変化させていくことをいう。生物有機体としての量的増大の面を特に成長と呼んで区別するように、発達というときの力点は、誕生から死に至る各段階ごとの人間の精神活動や心理的特性の変化におかれている。一定の方向への変化という時の中心は、個体が複雑で高次の構造と機能をもつてくることにあり、しかも人間の発達は、基本的に生物学的個体から社会的・文化的存在へと進化、発展することであるから、発達は価値概念として使われることが多い。 ・ 人間の社会的・文化的存在としての発達は、学習と不可分に結びついている。しかし発達の社会学理論が示すように、個人にそのような学習を起させるのは、第一次的には社会化の働きかけである。 ・ 発達と教育の関係は、発達をいかにして促進させるのかという面にとどまらない。発達にどのようにしてバランスをもたせるのか。どのような人間に発達させるか、更には発達の環境的条件をどう保障するかといった問題にまで及ぶ。
障害児教育 大事典	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語のdevelopmentには「潜在的なものが徐々に現れること」という意味がある。したがって、英語の語義から発達を心理学的にとらえようとすれば、遺伝的にうけついできたものが成熟によって開花していくことによる結果として理解できる。 ・ 発達は、身体・知能・社会性・感情など、心理的および生理的な個々の機能の変化としてとらえられ、その変化をもたらす要因として遺伝（成熟）に重きをおく考え方（生得説、成熟説）と環境（学習）に重きをおく考え方（環境説、経験説）およびそれらの折衷的な考え方（輻輳説）がそれぞれ主張された。 ・ 「発達とよぶにふさわしい変化を、どのような変化によって代表させていくか」はそれぞれであるが、共通してみられる視点として①人間の発達を、成熟や環境に一方的に制約されるものとしてではなく、対象の世界（諸能力、社会的、文化的遺産）を実践的な活動を通じてわがものとし、さらに新たな所産を創造していくことを通して実現されるものとみなす。ここでは発達する主体としての子どもの能動性が重視される。②発達を量的な連続的増大とみなすのではなく、いわゆる発達の節、あるいは質的転換期と呼ばれる不連続な時期を伴いつつ経過していくものとみなす。③発達のプロセスには個人化（個性化）と社会化という2つの側面がある。
新版心理学 辞典	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発達という言葉とは本来的に変化の「過程」というニュアンスが含まれているが、過去における心理学の研究ではどちらかといえば変化の結果としてとらえられてきたために、ダイナミックで因果的な視点が欠け、静止的な現象記述にとどまっていた。このことは人の発達という事実を、身体的・知的・情緒的・社会的などの諸相が互いに機能的に関連しあっている広い統一のある全体としてとらえるべきと考えられるのに、全体の中に位置づけてこなかったことも関連すると考えられる。 ・ 個体の変化を量的増大においてとらえるときに用いられる成長growthという概念と対置させて発達を価値的な概念としてとらえることも、ヒトの発達が現実の社会・文化の中での意図的、無意図的教育を通じてのいわゆる社会化の過程として考えられる以上、必要と思われる。

IV. 考察

「成長」と「発達」は教育と関わりの深いものといえるだろう。しかし、日常的に教育

現場において、子どもの「成長」や「発達」を「伸びた」とか「成長した」と表現し、それらを区別することはなかなかないと思われる。しかし、そこには子どもを捉える際の、成長的視点と発達の視点が、含まれていると感じられる。

本稿のまとめとして、まず「成長」という場合には身体の伸びといった量的な増大、また姿としての形態の変化が重視されるといえる。それは望ましい「伸び」や「育ち」と関わるといえ、より広義には、学習の習得や学習への意欲といった、社会的な望ましさの「伸び」や「育ち」ともいえるだろう。

一方「発達」という場合、成長と同じく量的な増大を含みつつ、質的な広がりをもさらに含むものと考えられる。例えば、「成長」と同様に身体の発達という場合には、量的な増加とともに第二次性徴のような形態や体のもつ機能、構造的な変化を示すものと考えられる。つまり、「成長」は増加や形態の変化を意味するのに対し、「発達」はそれに加え、内的にもつ機能や構造の変化をも含み、一般にそれに伴う精神機能や構造の変化過程や結果を内包するものといえる。

このようなことから、教育のアプローチというのは、「成長」というより「発達」の側にあるものと考えられる。そしてそれは、上昇的に伸びていくものだけでなく、時に縮減や衰退も含むものといえる。教師は、子どもが一人の個人として育ち、社会的にも育つ存在として、見通しをもち、「発達」に関わる望ましさという価値概念に、絶えず敏感でなければならないだろう。

本稿では、「成長」や「発達」の一般的な用いられ方として新聞記事による検討と辞典による検討を行ってきた。しかし、まだ「成長」とは「発達」とは何かという大きな問いに対するこたえはできていない。今後は、さらに各学説や理論的な背景を踏まえて問い続け、まとめていく必要があると思われる。

使用した資料（出典等）

- 1) フランク・B・ギブニー（1974）ブリタニカ国際大百科事典3．小項目事典
REFERENCE GUIDE ティビーエス・ブリタニカ．
- 2) フランク・B・ギブニー（1973）ブリタニカ国際大百科事典5．小項目事典
REFERENCE GUIDE ティビーエス・ブリタニカ．
- 3) 天城勲・奥田真丈・吉本二郎（1975）現代教育用語辞典（第4版）．第一法規．
- 4) 今野喜清・新井邦男・児島邦宏（2003）新版学校教育辞典．教育出版．
- 5) 上武正二・辰野千寿・石田恒好・高野清純（1974）児童心理学事典．協同出版．
- 6) 新村出（1998）広辞苑．岩波出版．
- 7) 小学館国語辞典編集部（2001）日本国語大辞典第二版第十巻．小学館．
- 8) 新世紀辞典編集部（1978）学研新世紀百科辞典．学習研修社．
- 9) デジタル大辞泉（ジャパンナレッジ）<http://na.jkn21.com>
- 10) 日本教育社会学会（1986）教育社会学辞典．東洋館出版社．

- 11) 日本大百科全書（ニッポニカ）（ジャパンナレッジ）（オンラインデータベース）
<http://na.jkn21.com>
- 12) 茂木俊彦（1997） 障害児教育大事典．旬報社．
- 13) 山崎英則・片山宗二（2003）教育用語辞典．ミネルヴァ書房．
- 14) 依田新（1977）新・教育心理学事典．金子書房．